

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5 年 3 月 1 日

氏 名 _____ 曾 加 _____

所 属 _____ 生涯学習基盤経営 _____ コース _____

学籍番号 _____ 23-227011 _____

指導教員名 _____ 河村 俊太郎 _____

1. 研究課題 _____ 日本におけるサブジェクト・ライブラリアンの利用者ニーズに関する研究 _____

2. 計画する学術活動の実施期間 _____ 令和 5 年 2 月 21 日 ~ 令和 5 年 2 月 22 日 _____

3. 日本学術振興会特別研究員（DC）の現在の採用状況 _____ ☐DC1 ☐DC2 ☒採用無し _____

4. 学術活動

☐国外 ☒国内

☐①英語論文公表

☐②研究科教員の研究プロジェクト参加

☐③フィールドワーク

☒④国際会議 (☒研究発表 ☒運営補助 ☐出席のみ)

☐⑤研究会 (☐研究発表 ☐運営補助 ☐出席のみ)

☐⑥研究指導委託

☐⑦留学

☐⑧国際研修

☐⑨国際インターンシップ

☐⑩その他（具体的に： _____)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④ 国際会議
● 活動内容 研究発表・運営補助 ● 研究会名 2022年度「グローバル・リーダー育成：欧州研修プログラム」 国際学術交流会 ● 国名・都市名 スウェーデン・ストックホルム、日本・東京 ● 発表題目 “Considering subject librarian from the perspective of Japanese user needs” ● 発表形式 口頭発表 ● 発表年月 2023年2月21日 ● 発表内容の概要 日本の大学図書館員には、大学における学生の学習や大学が行う教育研究に積極的に関わるための専門性が求められているが、そのような人材が不足していることや、自ら育成することが難しいという問題も続いている。このような専門性を持った人材を導入するために、これまで多くの試みがなされてきた。そのひとつがサブジェクト・ライブラリアンである。サブジェクト・ライブラリアンを巡って、文献レビューやインタビューなどの方法を通じて、現在のサブジェクト・ライブラリアンに関する研究の課題やこれからサブジェクト・ライブラリアンを日本の大学図書館へ導入するにはどうすべきかを、検討した。	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
- ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
- ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
- ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

今回の国際学術交流会では、「Considering subject librarian from the perspective of Japanese user needs」というタイトルで発表しました。修士課程時代からのサブジェクト・ライブラリアンに関する研究を中心に発表しました。この学術交流会は、東京大学とスウェーデンのストックホルム大学の共催で、両大学の学生が交流する機会を提供するものです。発表を通じて、研究テーマや今までの研究成果の一部を学位術交流会に出席している教員や学生と共有し、複数の意見を聞くことで、自分の考えを広げ、研究の新たなアイデアや可能性を見出すことができました。これらは、「教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨」の「研究成果を海外に発信する」という目的と合致しています。

本発表と質疑応答における議論から二つの課題が見出されました。

今回の質疑応答では、日本のサブジェクト・ライブラリアンの現状について質問がありました。1960年代に日本に紹介されたサブジェクト・ライブラリアンは、金沢工業大学で最初の試みを始めたが、その後数十年間は大きく発展しませんでした。私の今までの研究では、日本におけるサブジェクト・ライブラリアンの発展について文献レビューから多くの情報を集め、その中には日本の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの導入の可能性を論じた文献もありますが、日本におけるサブジェクト・ライブラリアンの事例を実践の観点から探ることはできておらず、現在の日本におけるサブジェクト・ライブラリアンの実践について詳しく調査していませんでした。今回の質疑応答を通じて、今後の研究では、日本のサブジェクトライブラリアンの現在の事例を適宜取り入れる視点を持ちたいと考えています。

また、サブジェクト・ライブラリアンの雇用形態についても、今回の質疑応答で質問されました。サブジェクト・ライブラリアンの雇用形態は、雇用形態や勤務地などさまざまな側面がありまして、現在、海外ではさまざまなパターンがあり、それを考慮すべきと示唆する研究も多くあります。今までの研究では、サブジェクト・ライブラリアンの資質のみを扱ってきましたが、上記を踏まえて、今後の研究では、日本における既存のサブジェクト・ライブラリアンの事例を、雇用形態の観点からも研究することができると考えています。

日本ではサブジェクト・ライブラリアンに関する研究は少ないため、今回の海外との交流を通じて、新たな視点を得ることができました。また、今回の学術交流会では、自分の研究を英語で伝え、発表するという新しい経験により、英語プレゼンテーション能力を向上することもできました。最初の資料作成から最後の発表まで英語で行われ、私個人の語学力、コミュニケーション能力の向上の助けとなりました。以上の経験は、将来、より広いプラットフォームで自分の研究を発表するのに役立つと思います。